

「女性の漁労への関わりレポート」別紙

青本調査詳細資料

○調査地域「旭川」

－昭和 56 年度「青本 1」－

P.44 旭川 E 氏 女性 旭川市

「漁獲期の初期には、短い期間ではあるが石狩川でヤシ yas（袋網）を用いて捕った。このとき、父、母、それに近所の人を加えた 4 人ほどで漁を行う。」

P.44 旭川 E 氏 女性 旭川市

「ヤシでの漁と同じ時期に、ウォルンチセ woruncise と呼ばれる水上の小屋でマスやイトウを捕った。ウォルンチセは、近所の石狩川の岸边近くの、流れの少なく底の深いところ（ヤーケタアンオオヒ yake ta an oohi 「岸边の深い所」）に建てる。そのようなところには魚が休みに来るからである。

まず川底に杭を立て、その上に板を渡し棚を作り、さらにその上にフキの葉でふいた小屋をかける。小屋の中は暗くなるから、床のあき間から水中を透し見ることができる。というのも、水面が小屋の陰になり光を反射しないからである。魚が床のあき間の真下を通るのを音も立てずに待ち構えている。このとき自分は父からフンモレ！hunmore！「静かに！」と言われた。魚が現れると、あき間を通してマレクで突く。小屋の中にあげて、なおもあばれているものは、イパキクニ ipakikni（叩き棒）で叩く。

近文でウォルンチセを作る者は父一人であった。また、普段父は一人で捕りに行った。このとき父が自分をウォルンチセに連れていってくれたのは、一人で行くのが寂しかったからであろう。

P.45 旭川 E 氏 女性 旭川市

「9 月から 12 月上旬にかけて、石狩川で捕った。しかし、石狩川では鮭は多くは捕れなかった。武利川で捕ったのを覚えている。」

P.45 旭川 B 氏 男性 旭川市

「鮭は秋、石狩川で捕った。特に、カムイコタンから納内のオトイポク otoypok と呼ばれる所にかけて多く捕れた。父と母、その他 2・3 人に連れられて舟で下りながらヤシで捕った。」

P.50 旭川 D 氏 女性 旭川市

「スブン、チチラクカを「こせん川」という川で捕った。晩のうちにラオマブ raomap（底の深い籠状のもの）を川底に仕掛け、翌朝取りに行った。これは女の毎日の日課だった。」

※スブン：アカハラ、チチラクカ：ドジョウ

P.50 旭川 D 氏 女性 旭川市

「エソックاپ esotkep（カジカ）はミミズを餌にして鉤を使わずに釣った。女はペラアイを用いなかった。祖母、母とよく魚を捕りに行ったものだ。」

P.51 旭川 C 氏 女性 旭川市

「家族で、大雪山の大函付近に住んでいたとき、ヤマベ、イワナを捕って、舟で旭川に運び売ったことがある。」

—昭和 57 年度「青本 2」—

P.48 旭川 F 女性 旭川市

「洞川にいた頃、ラオマブを仕掛けているのを見たことがある。」

P.54 旭川 F 女性 旭川市

「洞川（地名）の小川で、自分がスネを持って、母がペラアイで小魚を捕った。」

P.55 旭川 A 女性 旭川市

「約 2 m の糸に小石の錘を付け約 40 cm おきに約針をつけたものである。ヤツメウナギを餌にして一晩置くと、ウグイ、アカハラなどの小魚がかかっている。これは、石山キツエ氏自身が行なった。」

※延縄に関する説明。

○調査地域「静内」

—昭和 58 年度「青本 3」—

38P 静内 B 女性 新ひだか町

「自分の祖母がかもめが“豊畑”のあたりまで飛んできたのを見て川に行き、1m 程もあるのイトウを取ってきたこともある。他に icaniw（マス）も取った」

40P 静内 B 女性 新ひだか町

「母の一番上の姉は **marekpo** を使っていた。」

43P 静内 C 男性 新ひだか町

「妊娠した女やその夫が川に行くと **otapopo**（キウリ）が逃げてしまう。」

55P 話者記載無し 新ひだか町

「男でも女でも猟・漁がなく植物採取の下手な人は **ipesak** という」

124P 静内 B 女性 新ひだか町

「イチャニウ **icaniw**（マス）がナイ コル **naykor**（産卵する。原義は「川を持つ」）するのは 9 月である。背の盛り上がったマスをナイ コル チェブ **nay kor cep** という。エカシたちは秋まで浜の漁場で働かされるので、ナイ

ペカ **nay peka**（川岸を歩きながらマレク **marek** でマスなどを突いて捕ること）をする頃は、まだ家には女と子供しかいない。子供たちは末の子が 3～4 才になっていて、留守番ができたので、フチは、「アペ カムィ エシノツ **ape kamuy esinot**（火の神で遊ぶ。火遊びする）するなよ。」と言ってナイ ペカに出かけた。船に乗ってウシオツ ナイ **usiot nay** という川の奥のサルトゥン ナイ **sarutun nay** のナイ プツ **nay put**（支流が本流に流れ込む所）に船を揚げ、沢を上りながらマレクポ **marekpo** でマスを捕り始めた。ブンカル **punkar**（ぶどうづる）に 10 尾くらいずつ通して、ナイ プツに戻り、川岸に杭を打ってそれにブンカルを掛け、魚を水の中に置いて、また沢を上ってマスを捕った。

—平成 6 年度「青本 14」—

P.103 静内 A 女性 新ひだか町

「オプスケナイにはウグイ、ヤマベ、カジカ（チマカニ **cimakani**）、ドジョウ（チチラ **cicira**）がいた。学校から帰るとすぐに取りに行ったものだ。魚を見つけると、そこをめがけて玉石をぶつける。そうして、フラフラになった魚を取る。誰に教わったわけでもない。」

○調査地域「浦河」

—昭和 59 年度「青本 4」—

P.88 浦河 A 女性 浦河町

「トゥレブ **turep**（ウバユリ）をとりに行ったときに、スプン **supun**（アカハラ）をマレク **marek** でとった。」

P.88 浦河 B 女性、浦河 C 女性、浦河 D 女性 浦河町

「サケが夜に産卵しているところを、かぎで捕えた。」

P.91 浦河 A 女性 浦河町

「漁期に、月経時女が川をわたったことが知れると、チャランケ *caranke*（抗議）が起こる。そういう場合には、人々が酒を持って集まり、川の神への謝罪を内容とするカムイノミ *kamuynomi*（神への祈り）を行なう。」

P.107 浦河 A 女性 浦河町

「女性が、月のもの（生理）の時、川を渡ってはいけないのに川を渡った。川を渡ると川の神が怒って「秋味（サケ）」がのぼって来なくなるという。」

○調査地域「千歳」

－昭和 60 年度「青本 5」－

31P 千歳 B 女性 千歳市

「*isapakikni* は、男が作り、長さ 30 cm、経 5 cm ぐらいで、柳 (*susu*)、ミズキ (*inawneni*、*utukanni*) を用いる。〜〜女も *isapakikuni* を使って構わないが、女は船頭なので、普通男が魚の頭を叩く。」

－平成元年度「青本 9」－

29P 千歳 B 女性、千歳 A 女性 千歳市

「お産したら川へ 2～3 週間近づけなかった。橋も渡れなかった。*icakke* 汚いからといってわたらせなかった」

29P 千歳 A 女性 千歳市

夫と 2 月末に船に乗って鮭を取りに行った事がある。」

31P 千歳 B 女性 千歳市

「兄と漁に行く時に船頭をした。」

「女も *marek* を使って良いが、男が *marek* を使って女が船頭をすることが多い。」

－平成 2 年度「青本 10」－

P.36 千歳 B 女性（千歳） 千歳市

ウライ（籾）漁

「網を扱うのは男で女は舟を操作する」

P.40 千歳 B 女性（千歳） 千歳市

ヒメマス漁について

「私が 10 歳ぐらいの時、父について支笏湖に釣りに行った。」

「お父さんについて、水の深い処で、カパッチェブという魚を捕った。」

P.42 千歳 B 女性（千歳） 千歳市

「私らはエソッカペライ「カジカ釣り」とアムシペペライ「カニ釣り」をやった。」

P.45 千歳 B 女性（千歳） 千歳市

カニ漁

「漁法はイモクという釣り糸で釣る。アムシペペライという。アムシペクペライという。丸木舟で出かけて私のおばあさんが釣りに行く。20 から 30 匹、時には 50 匹も釣ってくる。油が入ったものおいしい。」

P.46 千歳 B 女性（千歳） 千歳市

エビ漁

「エビはざるに餌（魚のあら）をいれ、沈めておいてから上げるととれる（人のやっているのを見た）。ベコの沢という奥の沢のほうの女たちが出てきてとっているのを見た。ネシコシにフチ一人いて、タモもって 1 里も 2 里も下って、エビを 1 斗ほどもすくった。」

P.46 千歳 B 女性（千歳） 千歳市

トゲウオ

「小山田直美さんの家の近くに大きなヤチがあつて、馬が落ちたら上がらないといわれていた。小さな橋があつて、そこでその魚すくってみたことある。」

—平成 5 年度 青本 13—

P.22 千歳 C 女性 千歳市

「8 つか 9 つのころ、叔父の家に守っ子（子守）に出された。叔父は、川で漁をするとき、よく舟に私を乗せてくれた。叔父が言うには、「お前は、シノ カッケマツ sino katkemat（本当の淑女）で、カシ イソウシ フミ メノコ kasi isous humi menoko（漁に恵まれた女）だ。ポン カッケマツ チボソツ タ ア ワ アン pon katkemat ciposot ta a wa an（お嬢さんが舟尻に座っている）すれば、カシ イソウシ kasi isous（漁に恵まれる）するから、イソウン isoun（エビスがきく）するから、チパ パルル キシマ cip parur kisma（舟の縁をつかんで）して川さ落ちないように」とのことだが、今考えれば、私を乗せると舟が安定したからだと思う。しかし、大きくなっても私がともしりする（舟の尻に座る）だけで魚が

寄った。「とんどり」をイェトゥヌシ *ietunus* という。人によっては、魚が寄らない事もある。」

P.24 千歳 A 女性（千歳） 千歳市

「秋になると沼にチカが集まる。女が主にとる。女が集まって舟に乗って取りに行った。一匹ずつヨモギの莖に刺して持ってきたのを干して、干せたら灰（あく）に入れてあぶって食べた。」

○調査地域「美幌」

—昭和 60 年度「青本 5」—

44P 美幌 A 男性 美幌町

「魚を引き上げるには、テシコロベ *teskorpe*（たもあみ）を用いる。従って力のある者（キロロ コロ クル *kiror kor kur*）で、度胸のある者（ラメトツ *rametot*～からラメトク *rametok*、ラメトククル *rametokkur*）でないと勤まらない。一度網をおこせば何匹もとれる。テシコロベ *teskorpe* の口は、大人が股を開げた位程もあるので、大人の力のある者でないと扱えない。網を上げたら、川原へ持って行ってぶちまける。その際、棒でなぐったりしない。たたき棒（イパキツニ *ipakitni*）は用いなかった。数匹のアキアジにいちいちそんなものを使っていたのでは日が暮れてしまう。川原には、人々（主として老婆）が来ていて、勝手にもって帰る。なにしろ、只だから。それを各自家へ持ち帰り、開きにし、皮で靴（ケリ *ker*）を作る。」

46P 美幌 A 男性 美幌町

「昼の漁と異なり夜の漁に老婆達は来ない。」

49P 美幌 A 男性 美幌町

「*marek* は男が使う、女はやらない。」

51P 美幌 A 男性 美幌町

「*yaspe* という二人でもつ網を使う時、年寄りには無理だが、相手は女でも良い。ただし、生理の終わった者に限る。」

58P 美幌 A 男性 美幌町

「一般に生理中の女は川に入れない。生理の女はどこにも出ない。」

－昭和 61 年度「青本 6」－

91P 5-1-1. 魚の遡上・産卵 美幌 A 男性 美幌町

「マスの時期はウライが流されてしまうので、マレク marek で取るようにした。女もマレク marek で取ったそうだ。」

－平成 10 年度「青本 18」－

P.194 美幌 B 女性 美幌町

「常呂川でアキアジ、マス、ウグイ、コイを取った。マスのアイヌ語名はよくわからない。春 4 月頃雪が溶けたら、ユゴイ（ユツ yut）がのぼり、網でウグイを取った。5 月頃から 8 月までサクラマスを取り、つぎにホンマスをとる。それからアキアジ（カムィチェブ kamuycep）になる。常呂に住んでいたとき、熊谷というばあさんは新しく大きなサラニプ saranip を作って、「これ、カムィチェブ（サケ）のだ。」と言って、川で漁をする時に使っていた。取った魚を入れて背負ってくるのだ。」

P.194～195 美幌 B 女性 美幌町

「棒に網をつけ、川に流し、川のワンド（よどみ）の魚がたまっているところへ流す。すると、アキアジがたくさんかかる。棒は二間位も長さがある。一人でも網を上げることができる。網は綿糸で編んで作る。母が作っていた。」

○調査地域「屈斜路」

－昭和 60 年度「青本 5」－

47P 屈斜路 A 女性 弟子屈町

「母と二人で屈斜路湖の美幌峠側の沢口近くまで船でサケ漁に行った。網をさして取る。」

47P 屈斜路 A 女性 弟子屈町

「屈斜路湖の氷に穴をあけ、刺し網でオペライペ（イトウ）取った」

48P 屈斜路 B 男性 弟子屈町

「湖での漁は女の仕事。」

52P 屈斜路 B 男性 弟子屈町

「藻琴山などへ漁に行くと、女はヤマベ・アメマスを釣る。」

○調査地域「本別」

－昭和 61 年度「青本 6」－

35P 本別 A 女性 本別町

「7歳の時の記憶。美里川別（ピリペツ *pirpet*）沿いに一里ほど行った所に、イトージッコと言われたじいさんがいた。今の本別温泉からちょっと先に行った所にいた。じいさんの家の近くのピリペツに母と母の弟がテシを作った（テシ アシ *tes as*）。私はイトージッコの家に寝かせられ、母たちはテシのそばの川岸にカシコツ *kaskot* を作り、そこに泊まりながら漁をしていた。」

37P 本別 A 女性 本別町

「yas 漁をした時、網を持つのは祖父と母で私と叔父が貝を取った。」

○調査地域「帯広」

－昭和 61 年度「青本 6」－

38P 5-1-4. その他の漁法 帯広 B 男性 帯広市

「マーレク *màrek* を用いている人はすでにおらず、ヤスを使っていた。私は今はなくしてしまっただが、祖母の使っていたマーレク *màrek* の先を持っていたことがある。」

－昭和 62 年度「青本 7」－

94P 帯広 B 男性 帯広市

「13歳の時におばさんたちは伏古の16号で漁場をやった。」

－平成 4 年度「青本 12」－

P.35 帯広 A 女性 帯広市

秋味漁

「秋味は父親が、網の端を持って川の中を走り、私が網の端を持って川縁を走ってとった。」

P.35 帯広 A 女性 帯広市

ウライ漁（^{うけ}筥）

「^{うけ}筥でとったのは、学校に上がる前の5～6歳の頃で、毎朝この伏古川で孫ばあさんと一緒にとった。ウライはおばあさんが自分で作る。」

○調査地域「平取」

－昭和 62 年度「青本 7」－

29P 平取 C 女性 帯広市

「marek（回転銚）は長さ 1 間半もあり、男が使う。marek は 1 件の家に 4、5 本置いてあった。明かりの松明（スネ）を女が持って川の中程まで入ることがある。」

－平成 7 年度「青本 15」－

P.31 平取 A 女性 平取町

「川のボン チェポ pon ceppo（小魚）をハポ hapo（母）は延縄とって食べさせてくれた。延縄を意味するアイヌ語は知らない。はえなわと言っていた。虫をえさにして仕掛けておく。縄の先に重しをつけて沈めるらしい。」

－平成 8 年度「青本 16」－

P.26 平取 B 女性 平取町

「祖父と住んでいた沢（ヌブキオンナイ nupkionnay）は、大きな沢でないからエソッカ esokka（カジカ）、チチラ cicira（ドジョウ）、ユグイ（ウグイ）がいた。ザルもってすくったものだ。今はぜんぜんなくなった。サルカニ（ザリガニ）（ホルカレエプ horkareep）もたくさんいた。」

P.26 平取 B 女性 平取町

「ヌブキペツ nupkipet（貫気別川）にはウグイ（ユゴイ）、ドジョウ、カジカがいっぱいいた。川にはクトゥ kutu（ど）というしかけを作って仕掛けて取った。柳の枝で作る。エカシ ekasi（祖父）にクトゥ ノンコロ ワ エク kutu nonkor(nonkar?) wa ek（どうを見回って来い）といわれた。夕方仕掛けて翌朝見に行く。いっぱい魚が入っていると子供の力では持ち上げられない。とった魚は、マキリ makiri（小刀）で腹を割いて、イマニツ imanit（焼き串）に刺して、炉に立てて焼いた。アペサム タ apesam ta（炉のそばに）、西側に串を立て、半焼きにしてから、トゥナ tuna（火棚）に上げて干す。」

○調査地域「鵠川」

－昭和 63 年度「青本 8」－

P.28 鵠川 B 男性、鵠川 A 女性 むかわ町

「アキアジ（サケ）は取れるが千歳ほどはとれない。わしら小さい頃、千歳川ほどとれる所はなかった。昔は千歳にも行ったらしい。親も居たらしい。昔は 12 月になったら（アキアジを取っても）やかましくなかった。アキアジをカムイチェプ **kamuycep** という。クマ（カムイ **kamuy**）がよく食べるのでこの名がついたと聞いている。マスは 5 月頃から遡上し、サケは 9 月頃から遡上する。昔は占冠（シメカップ）までサケがのぼったと言う。ヤマベはサケの卵をねらってサケを追って行く。サケ、マス（イチャヌイ **icanuy**）、イトウ（チライ **ciray**）などの大きな魚は、父の時代にはマレポ **mareppo**（回転鉤）を使ったと言うが、見たことはない。夜の漁には、たいまつ（スネ **sune**）を使った。たいまつはガンピの木皮を火で温めながらねじったものを、割木に刺して作る。夜のサケはたいまつ（スネ）の明りで白く光って、動かずにじっとしているので取りやすい。シソ **siso**（梅毒、和人はカサという）の人がたいまつを持ってはいけない。また、女の人を持ってはいけないという。

P.30 鵠川 C 女性 むかわ町

ししゃも漁について

「丸木舟（チプ **cip**）を使って、網に入った魚を舟に上げるわけだが、一回あげるだけではそんなに取れない。網を上げる頃合いは、いいかげんになったら上げるというだけで、きまりはない。一日に何回上げるかわからない。私の姉達なら知っているけれど、自分は二～三回しか行ったことがないからわからない。」

P.32 鵠川 B 男性、鵠川 A 女性 むかわ町

「漁は好きな人がやるが、嫌いな人はしない。誘って良い人と悪い人が居る。漁の良し悪しに関係する。お腹の大きい人は川に近づいてはいけないと言う。」

P.32 鵠川 B 男性、鵠川 A 女性

「身持ちの人が川へ行くと漁が悪くなる。」

○調査地域「浦幌」

－平成8年度「青本16」－

P.153 幕別B 女性 幕別町

「十勝太の女は、12月20日から翌年の2月いっぱいまでチカを凍らせて「かます」（稲藁で編んだ袋）に入れる仕事で忙しかった。水揚げされたチカを日に何十回も「もっこ」で運んで、川（十勝川）の氷の上や、地面に敷いたムシロの上に広げた。「エビリ」という「ごみさらえ」のような道具でならずようにして広げた。暇なしにかまして（かきまわして）いなければ魚どうしがくっついてしまうし、また、早く魚がしばれる（凍る）ようにと、かます（かきまわす）。この仕事は夜中までやる。固く凍ったら倉庫に運んでおく。翌朝、男が沖に出たら、女たちは凍った魚を「とおし」（ふるいの一種）に通して、エビやコマイト、チカとを選び分ける。チカを20kgずつ「かます」に詰めて「いさばや」が買い付けにくるのを待つ。」

○調査地域「標茶」

－平成6年度「青本14」－

P.39 標茶A 女性 標茶町

「母は日雇い仕事ないときは、釣ばかりしていた。竹の竿、釣針、餌には筋子を使っていた。」

○調査地域「幕別」

－平成7年度「青本15」－

P.157～158 幕別A 女性 幕別町

「川で魚をとるときは、ハイナワ haynawa（はえなわ）でとった。母が小川に晩つけたものを朝早くとりに行った。母は餌にするミミズが嫌なので、私が針につけてあげた。ウゴイ（ウグイ）アカハラなどの小魚（ポンチェプ pon cep）がとれた。（「ハイナワにイナウキケをつけなかったか」との間に）女のハイナワには、イナウはつけなかった。また、ヤツメやドジョウ（チチラカ ciciraka）がとれた。」

－平成9年度「青本17」－

P.85 幕別A 女性 幕別町

「ウグイはよくとったが名前は知らない。」

○調査地域「白糠」

－平成 8 年度「青本 16」－

P.176 白糠 A 女性 白糠町

「「たも」網でウグイを取ってきて、和天別の家まで運び、腹を出して焼いてカマスに入れて天井から下げる。冬中食べた。山越しして運んで来るのは大変だった。「たも」の輪の直径は 40cm ほど。父母といっしょにとりに行った。」

P.176 白糠 A 女性 白糠町

「子供のころの和天別で川の魚を取った記憶はない。ウライをかけたこともない。」

○調査地域「阿寒」

－平成 10 年度「青本 18」－

P.194 阿寒 A 女性 釧路市

「常呂で熊谷、田中のばあさんはアキアジを取っていた。網で取っていた。田中さんは、ケリ keri を作るのもうまかった。」

P.196 阿寒 A 女性 釧路市

「7～8 歳頃学校へ行くようになって、子供が学校に行き易いようにと、町に住む高田熊五郎というアイヌの人に預けられた。下宿みたいなもので、米 1 俵もって預けられた。その時、湖での魚とりを経験した。」

P.196～197 阿寒 A 女性 釧路市

「母は私たちが眠っている間に 4 斗おけ一杯にしばれたヒメマスを入れ手そりで引いてきた。(中略) ヒメマスを取る竿は図*のようなものだった。長さ 1 尺 5 寸、一本の木を削って先端に切り込みを入れ、握り手が手につかめるほどの太さにしたものだった。左右にテグスを巻く糸巻きがついていた。幾尋(ひろ)おろすとヒメマスがかかるか分かっていた。この道具の名前は忘れた。針を何と言うかも忘れた。女でも作れるものだ。浮きはつけないが、鉛の錘をつけた。」*図は P.197

P.198 阿寒 A 女性 釧路市

「魚は網にえらを引っ掛けている。魚の通り道が分かっていた。17,8 歳くらいになると網の引き上げを手伝うようになった。」

P.198 阿寒 A 女性 釧路市

「ヒメマスは夏に丸木舟に乗って網でとった。母たちがイペシベツに住んで魚取りをするようになって、私とすぐ上の兄は学校に行くために高田熊五郎という人に預けられた。高田さんは丸木舟で網刺ししてヒメマスを取る人だった。私が舟の先に座り、高田のじいさんは後ろにすわり、櫂（アシナブ asinap）で「せんど（船頭）」した。漁の場所にくると、「アバ」（浮き）をといで行けと言われた。ぐずぐずしていると櫂で水をかけられ、泣きながらアバをといでいった（最後に浮き玉をどんと浮かべた）。

P.198 阿寒 A 女性 釧路市

「ヒメマスは沖に出て漁をする。深い所で漁をする。網には、アバという木製の浮きがついている。網は丸木舟の船首近くに置いてあり、高田熊五郎のじいさんが船頭で、私が体が軽いからと言って船首に乗せられた。「アバ広げろ！」と言われるとつぎつぎと浮きを流して網入れをする。やり方が悪いと櫂で水をかけられた。」

P.198 阿寒 A 女性 釧路市

「人が増えてくると、漁業組合でキナチャシナイとか場所を競るようになった。母はイペシベツを競ってとった。そこでイペシベツで何年か生活した。組合に入っていたのはアイヌだけではない。阿寒湖にはアイヌは何軒もいなかった。」

P.198 阿寒 A 女性 釧路市

「私が 17、18 才のころ湖のワカサギ漁とヒメマス漁で場所の取り合いで争いが起きてから組合ができて、誰がどこで取るか決まってきたが、昔はどこで取ってもよかった。」

P.199 阿寒 A 女性 釧路市

イトウについて

「妹は、自分の背まであるイトウをかついで、4 キロも先にある雄阿寒ホテルまで運んだことがある。郵便配達夫がクマが出たと逃げてきたが、それでも尻尾を引きずりながら持っていったということだ。」

P.200 阿寒 A 女性 釧路市

ワカサギ氷下漁

「阿寒湖には、もともとワカサギはいなかった。網走から移植したものだそうだ。ワカサギをとるとき、私と兄らとで引き綱をした。ワカサギをとる場所は秋のうちにくじで決める。3人の人手が必要だ。」

P.215 阿寒 A 女性 釧路市

「私が9歳のとき父がいなくなり、母と子供の6人暮らしで母は山子したり、ヒメマスを釣ったりして何でもして働いて子供たちを食べさせた。私は、初太郎、正雄、サワ、フサ、正吉の5人兄弟の3番目である。」

証言者来歴一覧表

仮名	性別	来歴
旭川 A	女性	明治 44 年 雨竜伏古コタンで生まれる。
旭川 B	男性	明治 35 年近文、川端町で生まれる。父母は、ウエンベツ宇遠別に生まれる。
旭川 C	女性	明治 28 年頃東旭川付近東ゴリョーチに生まれる。父は十勝芽室に生まれ、母は、近文に生まれる。
旭川 D	女性	近文に生まれる。父は永山生まれ、母は近文に生まれる。
旭川 E	女性	明治 31 年近文に生まれる。両親共に永山チェップベッコタンに生まれる。
旭川 F	女性	明治 33 年 十津川町菊水町で生まれる。
浦河 A	女性	明治 30 年生まれ、野深で育つ。浦河町塚町在住。
浦河 B	女性	大正 11 年生まれ、現在浦河町姉茶在住。
浦河 C	女性	大正 10 年生まれ、三石より姉茶に嫁す。現在浦河町姉茶在住。
浦河 D	女性	昭和 3 年生まれ、トリキシコタン（遠江）に育つ。現在浦河町姉茶在住。
帯広 A	女性	大正 10 年帯広伏古生まれ、伏古に育つ。帯広市在住。
帯広 B	男性	大正 3 年生。伏古で育つ。帯広市在住。
屈斜路 A	女性	明治 40 年屈斜路コタン生まれ。現在屈斜路コタン在住。
屈斜路 B	男性	大正 12 年屈斜路コタン生まれ。現在屈斜路コタン在住。
静内 A	女性	大正 1 年静内町農屋に生まれる。現在様似町西町在住。
静内 B	女性	明治 35 年東静内に生まれ農屋に育つ。豊畑在住。
静内 C	男性	明治 43 年ブレウシ（東別）コタンに生まれる。春立在住。
姉茶 A	女性	大正 9 年標茶町虻別に生まれる。現在標茶町虻別在住。
白糠 A	女性	大正 8 年、白糠西浜生まれ。現在白糠町在住。
千歳 A	女性	明治 41 年長沼生まれ、千歳市蘭越在住。
千歳 B	女性	明治 38 年ウサクマイ生まれ、千歳市蘭越在住。
千歳 C	女性	明治 39 年 6 月 28 日ランコシ生まれ。千歳市桂木在住。
美幌 A	男性	大正元年美幌生。現在美幌町美富在住。
平取 A	女性	大正元年、平取町ペナコリに生まれる。現在沙流郡平取町旭在住。
平取 B	女性	大正 15 年、平取町荷負生まれ。現在沙流郡平取町貫気別在住。
平取 C	女性	明治 29 年生。日高、平取町荷負本村に育ち、現在も在住。
本別 A	女性	明治 42 年生。本別町に育ち、本別町在住
幕別 A	女性	昭和 7 年、幕別町に生まれる。現在中川郡幕別町在住。
幕別 B	女性	大正 11 年、幕別生まれ。現在十勝郡浦幌町十勝太在住。
鶴川 A	女性	大正 9 年生。チン・コタン（汐見）に育ち、現在、鶴川町汐見二区在住。
鶴川 B	男性	明治 34 年生。トゥンニカ・コタンに生まれ育ち、現在鶴川町汐見二区在住。
鶴川 C	女性	明治 38 年生。モイベツ（春日）に生まれ育ち、現在鶴川春日在住。

※地名表記等は「青本」に掲載されている通り。